

I211 数理論理学

横山 啓太 (y-keita@jaist.ac.jp)

第 8 回 : 述語論理の意味論

述語論理の意味論

命題論理の意味論は原始命題/命題変数の真理値により定まる
付値関数 によって与えられた。

述語論理の意味論は次で与えられる「構造」 \mathcal{M}

- 変数の動く 領域 (集合) M とその上の
 - 定数記号 a, b, c が指す 元 $a^M, b^M, c^M \in M$
 - 関数記号 f, g が指す 関数 $f^M : M^n \rightarrow M, g^M : M^k \rightarrow M$
 - 関係記号 R, S が指す 関係 $R^M \subseteq M^n, S^M \subseteq M^k$

Example

$\mathcal{L} = (c, d; f, g; R)$ に対し,

- $M = \mathbb{N}, c^M = 0, d^M = 1,$
 $f^M(x, y) = x + y, g^M(x, y) = x \times y,$
 $R^M = \leq = \{(x, y) \in \mathbb{N}^2 \mid x \leq y\}$

とおくと, $\mathcal{M} = (\mathbb{N}; 0, 1; +, \times; \leq)$ は \mathcal{L} -論理式に意味を与える構造
(\mathcal{L} -構造) になる。

言語は $\mathcal{L} = (C; \mathcal{F}; \mathcal{R}) = (c_1, \dots, f_1, \dots, R_1, \dots)$ を一つ固定する.

定義 (\mathcal{L} -構造)

\mathcal{L} -構造 M とは集合 M と以下を満たす付値関数/解釈 v の組 $M = (M, v)$ である. ただし v は

- C の元を M の元に対応させる
- \mathcal{F} の n 変数関数記号を M 上の n 変数関数に対応させる
- \mathcal{R} の n 項関係記号を M 上の n 項関係に対応させる

をみたす \mathcal{L} 上の関数で, さらに以下に定める“項の解釈”, “タルスキの真理定義” をみたす関数 \bar{v} (単に v で書くことある)

- $\bar{v} : \mathcal{T}_M \rightarrow M$
- $\bar{v} : \mathcal{S}_M \rightarrow \{\mathbf{T}, \mathbf{F}\}$

を付随する.

構造に関する記法

以下の記法/用法もよく用いる.

- M は \mathcal{M} の領域, 宇宙 (universe) などと呼ばれる.

$$M = |\mathcal{M}|$$

とも表す. また \mathcal{M} と M を同一視し, 単に

$$M = (M, \dots)$$

などと書いて \mathcal{L} -構造を指すことも多い.

- $c \in C, f \in \mathcal{F}, R \in \mathcal{R}$ に対し,
 $v(c) = c^M, v(f) = f^M, v(R) = R^M$ などと表す.
これにより $\mathcal{L} = (c, \dots; f, \dots; R, \dots)$ に対して

$$M = (M; c^M, \dots; f^M, \dots; R^M, \dots)$$

などと書いて v は直接表に出さないことが多い.

\mathcal{L} -論理式の意味を解釈できる \mathcal{L} -構造 M が与えられると,

- 各 \mathcal{L} -項の解釈が自然に定まる.
 - 自由変数を持たない項 (閉項) は $|M|$ の元を表す.
 - 一般の項は自由変数を入力に持つ関数のように振る舞う.
- 各 \mathcal{L} -論理式の解釈が自然に定まる.
 - $\forall x \dots$ を “ $|M|$ 上の全ての x に対して...”
 - $\exists x \dots$ を “ある $|M|$ の元 x が存在して...” と読む.
- よって各 \mathcal{L} -文の真偽が自然に定まる.

\mathcal{L} -構造における解釈

Example

$\mathcal{L} = (c, d; f, g; R)$ に対し, \mathcal{L} -構造 $\mathcal{M} = (\mathbb{N}; 0, 1; +, \times; \leq)$ を考えると

- 項 $f(d, f(d, f(d, d)))$ の解釈は 「4」
- 論理式 $R(f(x, d), d)$ の解釈は 「 $x + 1 \leq 1$ 」
- 文 $\varphi \equiv \forall x \forall y (g(x, f(y, d)) = f(x, g(x, y)))$ の解釈は
「どんな $x, y \in \mathbb{N}$ についても $x \times (y + 1) = x + (x \times y)$ 」
- したがって φ は \mathcal{M} で “真/T” (これを $\mathcal{M} \models \varphi$ と書く)
- 文 $\psi \equiv \forall x \exists y (g(y, y) = x)$ の解釈は
「どんな $x \in \mathbb{N}$ についてもある $y \in \mathbb{N}$ が存在して $y \times y = x$ 」
- したがって ψ は \mathcal{M} で “偽/F”

Example

$\mathcal{L} = (0; 0; 0)$ とし, $\mathcal{M} = (M; ; ;)$ を \mathcal{L} -構造とする.

- 文 $\forall x \forall y \forall z (x = y \vee y = z \vee x = z)$ はどんなときに真か?

定義 (\mathcal{L}_M , 項の解釈)

$\mathcal{M} = (M, v)$ を \mathcal{L} -構造とする.

- ① $\mathcal{L}_M = (C \cup M, \mathcal{F}, \mathcal{R})$ とする. \mathcal{L}_M -項を次で定める.
 - C の元, M の元, 変数記号は \mathcal{L}_M -項である.
 - t_1, \dots, t_n が \mathcal{L}_M -項, f が \mathcal{L} に含まれる n 変数関数記号のとき, $f(t_1, \dots, t_n)$ は \mathcal{L}_M -項である.

また, \mathcal{L}_M -閉項全体を \mathcal{T}_M で表す.

- ② \mathcal{L}_M -閉項の解釈 $\bar{v}: \mathcal{T}_M \rightarrow M$ を次で定める.
 - $c \in C$ について $\bar{v}(c) = v(c) = c^M$.
 - $a \in M$ について $\bar{v}(a) = a$.
 - $f \in \mathcal{F}$ が n 変数関数記号, t_1, \dots, t_n が \mathcal{L}_M -閉項のとき

$$\bar{v}(f(t_1, \dots, t_n)) = v(f)(\bar{v}(t_1), \dots, \bar{v}(t_n)).$$

$\bar{v}(t)$ は t^M とも書く. このとき最後の条件は $(f(t_1, \dots, t_n))^M = f^M(t_1^M, \dots, t_n^M)$.

定義 (タルスキの真理定義)

$\mathcal{M} = (M, \nu)$ を \mathcal{L} -構造とする.

- ① \mathcal{L}_M -論理式: \mathcal{L} -論理式の \mathcal{L} -項を \mathcal{L}_M -項に置き換えたもの.
 S_M : \mathcal{L}_M -文 (\mathcal{L}_M -閉論理式) 全体の集合.
- ② $\bar{\nu}: S_M \rightarrow \{\mathbf{T}, \mathbf{F}\}$ を次で定める (タルスキの真理定義という).

$$\bar{\nu}(t = s) = \mathbf{T} \Leftrightarrow t^M = s^M$$

$$\bar{\nu}(R(t_1, \dots, t_n)) = \mathbf{T} \Leftrightarrow (t_1^M, \dots, t_n^M) \in R^M$$

$$\bar{\nu}(\psi_1 \wedge \psi_2) = \mathbf{T} \Leftrightarrow \bar{\nu}(\psi_1) = \mathbf{T} \text{ かつ } \bar{\nu}(\psi_2) = \mathbf{T}$$

$$\bar{\nu}(\psi_1 \vee \psi_2) = \mathbf{T} \Leftrightarrow \bar{\nu}(\psi_1) = \mathbf{T} \text{ または } \bar{\nu}(\psi_2) = \mathbf{T}$$

$$\bar{\nu}(\psi_1 \rightarrow \psi_2) = \mathbf{T} \Leftrightarrow \bar{\nu}(\psi_1) = \mathbf{F} \text{ または } \bar{\nu}(\psi_2) = \mathbf{T}$$

$$\bar{\nu}(\neg\psi) = \mathbf{T} \Leftrightarrow \bar{\nu}(\psi) = \mathbf{F}$$

$$\bar{\nu}(\forall x\psi) = \mathbf{T} \Leftrightarrow \text{全ての } a \in M \text{ について } \bar{\nu}(\psi[a/x]) = \mathbf{T}$$

$$\bar{\nu}(\exists x\psi) = \mathbf{T} \Leftrightarrow \text{ある } a \in M \text{ が存在して } \bar{\nu}(\psi[a/x]) = \mathbf{T}$$

- $\bar{v}(\varphi) = \mathbf{T}$ であることを

$$\mathcal{M} \models \varphi,$$

- $\bar{v}(\varphi) = \mathbf{F}$ であることを

$$\mathcal{M} \not\models \varphi$$

で表すことも多い.

- \models は充足関係と呼ばれる.
- このスライドでも \bar{v} は表に出さずに以降この記法を用いる.
- $\bar{v}(\varphi) = \varphi^{\mathcal{M}}$ などとも書くこともあるが, $\mathcal{M} \models \dots$ の記法が多く使われる.
- 真理条件は閉論理式に対して定義されるが, 一般の論理式に対しては, その全称閉包を取って真偽を定める.

充足可能性と恒真性

定義 (充足可能性 satisfiability)

\mathcal{L} -文 φ が充足可能 (satisfiable) とは, ある \mathcal{L} -構造 \mathcal{M} が存在して,

$$\mathcal{M} \models \varphi$$

となることである.

定義 (恒真性 validity)

\mathcal{L} -文 φ が恒真 (valid) とは, 任意の \mathcal{L} -構造 \mathcal{M} に対して,

$$\mathcal{M} \models \varphi$$

となることである.

命題論理の時とは異なり, 与えられた \mathcal{L} -文の充足可能性や恒真性は簡単には判断できない.

充足可能性と恒真性

$\mathcal{L} = (c, d; f, g; R)$ とする.

(f, g は 2 変数関数記号, R は 2 項関係記号)

Example

\mathcal{L} -文 $\forall x \forall y (f(x, y) = f(y, x))$ は

- \mathcal{L} -構造 $\mathcal{M} = (\mathbb{N}; 0, 1; +, \times; \leq)$ で真, よって充足可能である.
- しかし恒真ではない.

Example

\mathcal{L} -文 $\forall x \forall y (x = y \rightarrow f(x, d) = f(y, d))$ は恒真である.

Example

\mathcal{L} -文 $\neg(c = d) \wedge (\forall x \forall y (x = y))$ は充足不可能である.

定義 (理論)

\mathcal{L} -閉 論理式の集合 Γ を \mathcal{L} -理論という.

定義 (理論のモデル)

理論 Γ に対し, 任意の $\varphi \in \Gamma$ に対して $M \models \varphi$ であるとき M を Γ のモデルである, といい,

$$M \models \Gamma$$

で表す.

定義

\mathcal{L} -論理式 φ が \mathcal{L} -理論 Γ で恒真 ($T \models \varphi$ で表す) とは, 任意の Γ のモデル M に対して $M \models \varphi$ となることである.

Example

$\mathcal{L}_G = \{e, \cdot\}$ とする. (ただし e は定数記号, \cdot は 2 変数関数記号)
群の理論 G は次の \mathcal{L}_G -論理式の全称閉包で与えられる.

① $(x \cdot y) \cdot z = x \cdot (y \cdot z)$

② $x \cdot e = x \wedge e \cdot x = x$

③ $\exists y(y \cdot x = e \wedge x \cdot y = e)$

$\mathcal{M} = (M; e^M, \cdot^M)$ が理論 G のモデルであるとき,
 \mathcal{M} は “群” と呼ばれる.

またこのとき, 次が成り立つ.

● $G \models \forall x \forall y \forall z ((y \cdot x = e \wedge z \cdot x = e) \rightarrow y = z),$

● $G \models \forall x \forall y (y \cdot x = e \rightarrow x \cdot y = e).$

定義 (部分構造/拡大)

$M = (M; \dots)$, $N = (N; \dots)$ を \mathcal{L} -構造とする. M が N の部分構造である, あるいは N が M の拡大であるとは,

$$M \subseteq N$$

であり, さらに

- 任意の $f \in \mathcal{F}$ と $a_1, \dots, a_n \in M$ について

$$f^M(a_1, \dots, a_n) = f^N(a_1, \dots, a_n)$$

(すなわち $f^N \upharpoonright M^n = f^M$),

- 任意の $R \in \mathcal{R}$ と $a_1, \dots, a_n \in M$ について

$$R^M(a_1, \dots, a_n) \Leftrightarrow R^N(a_1, \dots, a_n)$$

(すなわち $R^N \cap M^n = R^M$).

Example

- 群の理論 G のモデル M の部分構造 N は群の理論 G の 1,2(の全称閉包) を充足する.
 - ① $(x \cdot y) \cdot z = x \cdot (y \cdot z)$
 - ② $x \cdot e = x \wedge e \cdot x = x$
 - ③ $\exists y(y \cdot x = e \wedge x \cdot y = e)$
- すなわち 群の部分構造は“(部分)モノイド”になっている。

† ただし部分構造の性質は構造(上の例では群)の表現の方法によっても変わってくる。

Example

$\mathcal{L}'_G = \{e, \cdot, \circ\}$ とし (ただし \circ は 1 変数関数記号)

理論 G' を次の全称閉包で与える.

① $(x \cdot y) \cdot z = x \cdot (y \cdot z)$

② $x \cdot e = x \wedge e \cdot x = x$

③ $x^\circ \cdot x = e \wedge x \cdot x^\circ = e$

- G' のモデルも “群” である.
- 今度は $M \models G'$ で N が M の部分構造のとき, $N \models G'$ となる.
- すなわち N は M の部分群となる.

様々な理論のモデルやその部分構造/拡大などの性質を調べる研究は「モデル理論」と呼ばれ、数理論理学の一分野をなしている.